

第四〇回村研大会印象記

武田共治

今大会は、四〇年もの長い航海を終えた「村研号」が、一時の疲れを癒し、船体の再点検・整備を行い、大漁日指して牛深港を船出した、とても言えるようなものであった。

四〇年もの航海であったのだから、船体にひびが入りたり、計器類が旧式になってしまっては当然のことである。装いを新たにした「日本村落研究学会」が、大海の荒波をどう乗り切るのか。現代日本におけるその存在意義はいかなるものか、私自身も問い合わせたいと思う。

ところで、今大会の第一の印象は、新しい村研の担い手層が見えてきたのではないか、ということである。印象記であるから、大会諸報告の内容には立ち入らないが、まず年々報告数が増える傾向にあることが注目される。一九八八年の第三六回大会が九であったが、それ以降一〇、八、一二、と推移し、今大会において一六と最高を記録している。それも、大学院生を含む若手・中堅の報告が増えているようである。ここ数年、①共通課題がまとまらない、②年

報を会員さえ購入しない、③大会不参加層が固定化してきた、といったことから村研の存続が危ぶまれてきたのであるが、若手・中堅を中心とした会員の研究エネルギーはむしろ増加の傾向にあるわけである。報告が増えればよいというものではないという意見もあるが、これこそ、「村研号」再出港の原動力であると考えた方がよいと思う。

第二の印象は、会員の研究関心がなるほど多様化している、ということである。国際比較といつても、韓国、タイ、イギリスと広がっており、また、これまでの村研報告としては非常に少なかったと思われる方法論に関する報告が見られたことも印象的であった。中村共同体論の再検討（三溝博之氏）、有賀同族団論の再検討（長谷部弘氏）、ウェーバー研究（野崎敏郎氏）、コーホート分析の適用（池岡義孝氏）、などである。私も過去にそのような報告を考えた時期があつたが、どういうわけか、出来る雰囲気ではない、と判断してしまったことがある。今は状況が違うのであり、よいことだと思う。これらのことから、共通課題設定の困難性と表裏の関係にあるわけであるが、私としては、徐々に多様性を貫く共通課題の設定が可能になってくるものと楽観している。その点で、新理事会でも話されたことであるが、三溝、長島、國方、長谷部四氏の共同質疑、あるいは高橋明善氏を中心とするグループ報告のようなものの展開が、共通課題の担い手として期待されると思う。

第三に、「村研号」の新方向が、会員三四三名のうち、一〇〇名に満たない会員で決められているという事実が印象的であった。勿論、やむを得ないことである。また、大会不参加＝村研離れでもないが、三分の一にも及ぶ会員が新方向をどう見ているのか、気にな

るところである。今後一層、より多くの会員が関われるような、多様な学会活動が求められていると思う。村研の伝統をどう活かし、多様な会員のエネルギーをどう引き出すか、まだまだ課題は多いといふのが、私の印象である。

最後に、米沢先生をはじめとする大会事務局の方々、本当にご苦労様でした。深く、感謝いたします。

(弘前大学)